令和３～４年度　施設提案型モデル事業　「最終報告書」

施設名　龍雲寺学園バウデア学舎

【取り組みのテーマ】

こどもの最善の利益を考える
国際法のこどもの権利条約を基にした、こども指針（仮称）が議論され、真のこども中心の教育保育を考え、こどもの主体とは何によって保障されるのかを検証し実践する。

【２年間の主な取り組み内容】

１，クラスの活動概念を大人中心からこども中心に変換する

近年までは、保育所として保育の指導計画を年間計画・月案・週案等に別けて、月１回の職員会議の実施等の、国や行政の指導のもとで実践されていた。故に、立てた計画の通り実践し改善しながらも、均一的なカリキュラムや意思統一が優先され、安全面・衛生面・健康や栄養面では有効だが、学びや遊びの活動としては創造性や主体性や多様性や展開力が充分に発揮できない特性が多く見られ、日本の乳幼児教育保育の問題点として中央教育審議会等でも指摘されている。

又、現状の保育の年齢区分は通年制となり、例えば、満３歳以上になっても未満児クラスの扱い（4 月生まれは 3 歳 11 カ月まで未満児クラス在籍となる）や、自我形成期の自己の爆発の時期の満 2 歳の時期が１歳児クラスの概念で保育されている実態を見てきて、保育指針や幼保連携型認定こども園教育保育要領に書いてある事への誤理解が存在していると考えた。長い歴史と経験の積み重ねの継続性を重視し、社会状況やこどもの権利への認識が不十分だったと考えている。(人は新たな知識を得る事よりも、現状を変える方が難しい・ケインズ)

そこで当園では、クラス編制を満年齢の月齢制を中心に考えてひとり一人を検証すると２・３・４歳の異年齢保育体制となった。又、０歳１歳のクラスはひとり一人の発達に合わせた環境を重視し保育士定数に囚われずに、自我形成時期の後半は２・３・４の異年齢クラスとの交流等を促し、多様な保育教諭やこども同士の関係性を保障した。そして、５歳児は単独クラスとするが、活動範囲は自由で自己決定を基本とした。クラスで活動するカリキュラムから、子ども自身が課題や目標や希望を持って遊びを通して学び関係性を持てる環境のクラス編制とした。

【決めごと】①朝のお話しの会や食事はクラスごとで活動するが、遊びに関しては安全面が確保されれば、こどもの自主決定行動とする。②クラスの人数と配置は２５名までの複数担任を基本として、１人の大人の価値観に囚われない様にする。③机や棚や椅子を適切の配置し、交流するスパースと一人で集中出来る場所を確保する。（子どもの 2 面性、孤独な研究者・ピアジェ、社交的な法律家・ビゴスキー）クラスの椅子はこどもの半数程にして流動性を持たせる。④マテリアルルーム（道具部屋）を設置し、こどもが自由に欲しいものを選び部屋に持ち帰る環境を作る。（時には必要でない物もあるが、探索行動の一部と考える）⑤保育教諭は自分の担当児優先の意識を改め全ての園児に関心と責任を持つ。⑥他のクラスで何が計画さ

れ何が起きているか？を互いに知る必要性がある。こどもの活動や遊びの展開に応じて保育者の責任範囲が流動的と成り、担当範囲を固定的に決めるのでは無く、保育者同士が子ども理解と連携性を持って流動的に担当範囲を変化させるフォーメンション体制をとる。園全体がこどもの活動を最大限尊重する・行動（探索）時間（探求・試行錯誤）アフォーダンス（こどもの意識の環境）を保障する

結果的に、園全体で保育・教育を行う意識が向上し、同時にこどもひとり一人の理解と保育者の連携が重要なのだと確信できた。保育者が担当児への執着心や他者評価を気にする事無く、活動をプロセス評価できるようになった。

２，緩やかな計画　（後追い指導・援助計画）

教育・保育の指導計画等が、固定的な計画をトレースする（計画通り活動する）保育教育が目標と成り、子どもを嵌め込んでいく大人中心の実践を多く見てきた。こどもに自由と選択権を持たせると遊びの展開は無限に広がり深まる、そして成功や失敗どちらにも大きな価値が見出され探求の継続性が保障される。こどもの最善の利益を考えた時に、日々、瞬間、瞬間にこどもの意識と活動と関係性は変化し、保育の正解は一つでは無く・永遠でも無い事を私達は実感させられている。

ゆえに、こどもが自由に展開できるように計画は大まかにして日々対応変化する事が必要となった。こどもの後追いの保育は禁物と言われてきたが、こどもの活動を観察し配慮し柔軟に環境を整える為には、あえて、後追い保育・教育計画をする意識の方が良い（修正するのが当然）結果となった。ただし、絶対的に計画は必要で保育者に子ども理解と見通しとねらいが無ければ振り返りも不可能である。緩やかな計画は振り返り後の改善や展開が適切でスムーズに進み、こどもの学びと遊びのプロセスの積み重ねの経験が保障できた。こどもが自由になるには保育者も自由に考え受け止めるスキル（目の前のこどもを理解し自分で考えて計画する）が必要となった。指針が全体的な計画と書き変えられた本当の意味を理解出来た様に我々は実感した。

３，社会的保育教育（固定的担当制保育からの脱却）

アタッチメントの重要性は言うまでもないと思う。それ故に、一対一の濃い関係性が重要と認識され、3 対 1 よりも 2 対 1 の保育の質が良いと言う保育実践者も居る。しかし当園では、先ずは特定の保育者とこどもの信頼感からのアタッチメント形成は大前提であるが、そこで留まらず他者との関係性構築を保障する意識がある。

特定の保育者との信頼と安心感を基に、こどもが冒険の旅に飛び出せるように背中をそっと支え、押して援助する専門性が必要と考える。活動範囲が広がれば、他のこどもや他の保育者との関係性の中で新たなアタッチメントの形成や体験が展開され集団と成りやがてクラスと成って行く。乳児は決められた担当制が良いと一般には言われているが、安定はしているが限られた誰かだけの責任や範囲での狭い関係性になっている面があると思う。又、担当児に執着して他児との関係性が疎遠な状況も良く目にしている。専業主婦等の孤独な子育て状況と同じ問題点が保育現場で起こるのは何とも皮肉と言える。こどもにアタッチメントが形成されれば、園内では安心安全なこども中心の環境が整っている。多様な他者との関係性をこども自身のペースで築ける教育保育が必要と考える。

実例、当園の０歳児クラスは１階玄関の近くにある。又３０年前から０歳児の環境によくある、こどもの活動を遮る柵は設置していない。その中で、コロナ対策で

部屋のドアも開放していた晴れた６月に、１２カ月児がハイハイして部屋から玄関を通って園庭に出て、ニコニコしながら３０分間ほど園庭で探索行動して部屋に帰って来た。担当は送り出し園庭の保育教諭に任せて他の園児との交流も含めて楽しんでいた。その後、その園児は日常的に園庭散歩（ハイハイ）を楽しむようになり他の０歳も楽しむようになった。又、園庭に出る前に保育者に顔を向け確認し合ったり、雨では玄関から戻ったり、コースを変えたり、お気に入りの場所（砂場）を定める等ルーチンを意識していた。この事で０歳が行動に見通しを持っている事が確認された。この様な行動は出会う他者や環境を信頼し自己決定で行動する様子は、社会を信頼する事に繋がっていると確信する。ゆえに、家庭的保育に留まらず、社会的教育保育機能と専門性が少子化社会の日本に必要と感じ、当園の目標は「社会的教育・保育」と定めた。

４，分散型リーダーシップ

長きにわたって、日本は国から県と金沢市を通して行政指導の下に、最低基準や規定違反が無いかが問題となり、より高質な保育の追求義務は無かった。よって、上意下達型の指示指導によって保育はと統一均一化され易い形態と成っていた。独自路線の建学の精神を述べる幼稚園教育も小学校の準備や適合を優先する傾向が有りひとり一人の対応は充分とは言えない。

その中で、こどもの主体性を尊重し多様性を保障するためには、上意下達のリーダーシップよりもミドルリーダーを活用した分散型リーダーシップへの変換が必要と考えた。上司の意見を初任者やパート保育者に説明するミドルリーダーでは無く、初任者の意見や現場状況を上司にも報告し意見するのがミドルリーダーの役割であり、初任者にも自ら学ぶ努力をするマインドのリーダーシップが必要となる。要は、皆がこどもを理解し考え合い検討し合う関係性が重要となる。

又、日々変わる教育保育の展開に対応するには月１回の職員会議では反省しか出来ず、手遅れで毎回同じことの繰り返しとなる。保育者が適時最適に対応するには自己判断と相談検討できる保育者同士の関係性や環境が実践現場に整備されてなければならない。園長・主幹の指示命令に従うだけでなく、保育士や自ら考えられる状況とスキルがこども中心の教育保育には必須である。

特に幼保連携型認定こども園は学校であり、カリキュラムマネジメントする権限と実践が義務付けられている。同時に０歳から小学校までの学校教と育保育全体を担当するので、家庭教育の補完を脱却した、保育士や幼稚園教諭とは違った専門性が必要で実践を積み重ねている。そして、この部分は現在石川県が日本初で研究検討しており今後がたのしみである。

主体的自由と多様性の為には、保育者間にも同様に相互的（インタラクティブ）関係性の分散型リーダーシップによる検討振り返りが必要となる。ただし、安全面・健康面・衛生栄養面の正解は１つなので、上意下達でも問題ない。

【研究まとめ】

①クラスの活動概念の改革　　②緩やかな計画
③社会的教育保育　　④分散型リーダーシップ

其々の取り組みを説明したが、こども中心の 0 歳から 6 歳就学までの教育保育とは何なのかは未だ定義できなかった。当に、こどもの思いと願いを受けとめ実践を改善し続けて積み重ねるプロセスそのものが本質の様に考えている。

正解が多様で変化し続ける中でどの様な取り組み（研修）が必要なのか。この事項に関しては、PD 研修（professional development 専門性の展開）医師や裁判官弁護士等と同様に実践の検証振り返りから専門性を高められる、対話検討型の研修の必要性が示した。中でも教育保育では、PTD 研修（progress through dialog 対話を通じた進化展開）を園内・園外・公開保育等の研修を大学・養成校・各専門家・保育者が相互的に対等に専門家として検討研究し合う体制が必要で、当園は日々実践し地域全体の教育保育向上に今後とも精進したいと思います。

龍雲寺学園バウデア学舎　　木村昭仁